

『立山曼荼羅』を旅する

米本光徳

身の毛が総気立つという言葉がある。

私は心の中でわか仕込みの般若心経を必死に唱えた・・・。

1. 劔岳

社会人山岳会に入ると恒常的に劔岳に行く。

その時は確か三度目だった。いつもは信濃大町から黒部川下廊下を辿り、ハシゴ段乗越から入山するのだが、この時は美女平から観光バスガイドの立山の歴史話に耳を傾けながら室堂に向かった。ザックの中には富山名物「鱒の寿司」がしのばせてある。

ヘアピンカーブを曲がる度に、雄大な立山連峰の景色が広がった。左手には落差日本一の称名滝、大日岳、右手には佐々成政の黄金伝説で知られる鋤崎山があった。

室堂に立つと、山崎カールを正面に立山が大きい。右手には一の越の鞍部を挟んで浄土山がある。ここから劔岳に至るには、いったん雷鳥沢に下った後、別山乗越から日本三大雪渓の一つである劔沢に入る。

合宿三日目、真砂沢の底から見上げる空は抜けるように蒼かった。天幕を出ると、源治郎尾根のⅠ・Ⅱ峰、平蔵谷フランケ（側壁）に向かった。この尾根は、東面の長治郎谷と平蔵谷の間を頂上に向かって一直線に駆け上がり、中間に二つの急峻な岩峰をもつ。

前半は何もかもが快適で、仲間をつなぐザイルは生き物のようにのびた。眼下には平蔵の雪渓を行く登山者が小さく見え、西の前劔から縦走者の明るい声が聞こえてくる。

しかし、いつの日もターニングポイントはふいにやってくる。

Ⅱ峰を懸垂下降した時だった。黒部峡谷を挟んで後立山連峰、鹿島槍ヶ岳からネットリとした薄墨色のガスがオシロスコープの波形のように押し寄せた。あたりを不気味な静けさが包む。一般的に劔岳は、黒部峡谷を挟んで東の鹿島槍ヶ岳が悪天に包まれると、およそ半時でその渦中に陥る。私達は登攀に夢中になるあまり空の変化を見過ごしていた。

数分後、大音響を合図に「氷のつぶて」が雨のように襲いかかった。

その有様は「一天にわかにかき曇り」、俵屋宗達の「風神・雷神」図どころではない。三人は登攀具をほうり投げ、長治郎谷側の狭いルンゼ（岩溝）に飛び込んだ。

「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦～般若心経・・・」

2. 一枚の絵図

それから数年後、立山博物館で一枚の絵図に出会った。

山はどれもうねり、伸び上がり、膨らみ、地中に潜む得体の知れぬ靈気を天空に吹き上げるように描かれている。『立山曼陀羅』である。曼陀羅は那智、熊野、富士にもあるが、この絵図は最も遅い時期に成立したものという。

古来、日本の山は神々が宿る地であった。同時に人は死ぬと靈魂は別の世界へ行くのではなく「現実の山」へと還り、自分達の子孫を見守ってくれると信じられていた。

これは山中他界観といわれるものだが、そこへ9世紀から10世紀頃、中国から天台宗や真言宗の密教が輸入され、靈魂の集まる山は、極楽と地獄が存在する場となった。

※

立山曼陀羅は、開山縁起、地獄、浄土、芦峯寺布橋灌頂絵、立山禪定案内で構成される。その原色に近い色彩で描かれた図柄には、右上上空に菩薩群の降臨する姿があった。

日輪を背に天女の舞う山は浄土山、その意味するところは平和と安らぎ、すなわち極楽浄土の世界であり立山信仰の象徴だった。

左手には氷の刃のように立ち並ぶ針鋒群があった。上空には怪しくうごめく雲と月が描かれ、中段には、つき臼で人間を打ちつぶす青鬼、赤鬼の姿がある。閻魔大王が鎮座する中、まな板に乗せた人間を包丁で切り刻む場面もある。戸板に乗せた人間の額に五寸釘を打ち込む鬼や火の車を引く鬼の姿も見えた。これは地獄だ。

ところで立山・劔の絵図ほど、地獄と極楽が対峙して描かれたケースも少ない。

かつて韓国やインドでも仏教絵図に出会ったが、立山曼荼羅は特に地獄が強調され、その有様は阿鼻叫喚の典型のように思える。今昔物語集が伝える『日本国ノ人罪ヲ造テ多ク此ノ立山ノ地獄ニ墮ツと云ヘリ』そのままに、餓鬼道の世界、畜生道、修羅道、衆合地獄、鉄車地獄と、オソロシイ責め苦を受ける人々の様子がコレデモカと描かれ、息を飲む。

それは現代に置き換えるなら、理性を失った戦場の拷問にも等しい。

唯一ほっとさせられるのは、血の池に咲く蓮の花の上の如意輪観音菩薩が、堕ちた女性に救いの手をさしのべていることくらいである。そう考えると、曼陀羅は「立山に地獄あり」をより際立たせ、逆に人々に極楽浄土への思いを強めようとしたに違いない。

立山曼陀羅は、現在30余り残っているというが、芦峯寺（中宮寺）系と岩峯寺（立山寺）系がよく知られる。前者は門前に33の宿坊を持つ村落で、後者は24の宿坊を持つ。図柄を見比べると、芦峯寺系は、大胆な構図を取り地獄の描写もドギツイ。

これは立山連峰を知らない全国の人々を対象に布教活動を行う故、インパクトの強いものにする必要があったからだろう。立山衆徒はこれをもとに毎年農閑期になると各地へ足を運んだ。佐伯有頼の開山縁起を説き、次に地獄と極楽を語り（「絵解き」）、男性には夏の禪定登山を勧誘した。

岩峠寺系は、しっとりと落ち着いた色合いをして山水画を連想させる。

これは布教活動が越後、越中、加賀に限定されていたためだった。地元では立山・劔岳は朝な夕な常に人々の目線の先にあり、それほど地獄を強調する必要もなかった。

また、芦峠寺系以上にクッキリと立山の山頂への道が、岩の弱点を縫うように描かれているのも、もう一つの特長である。その意味するところは、立山信仰の運営はそれぞれ役割が決められ、山中の管理は主に岩峠寺が受け持ったためだろう。中段には岩窟で座禅を組み、その上には下界を見下ろす僧の姿がある。これは一ノ谷の岩窟と室堂平の玉殿の岩窟の修行僧に違いない。

一方、芦峠寺は麓の管理と大規模な宗教行事を担当し、熊の腸や薬草の販売も行った。富山の薬売りもその延長線上に位置し、日本各地に広がり、浸透していった。

3. 布橋灌頂会

立山の禪定登山とともに、絵図の下方に描かれた姥堂は、当時のもう一つの世相を如実に映し出す。

江戸時代、立山は女人禁制の山だった。それ故、極楽浄土の幸福を思い描く女性は、秋の彼岸に、こぞってこの姥堂で行われる布橋灌頂会への参加を望んだ。

芦峠寺系の曼陀羅には中宮寺で行われたその模様が印象的に描かれている。

女性は死装束に着替えて「この世」の閻魔堂に入ると、現世の罪業を告白し懺悔した。それから明念坂を辿り、姥堂川に架かるこの世とあの世の境界となる赤い布橋（天界へ生まれ変わるための「天の浮き橋」）を渡った。この橋は日光の神橋、高野山の一の橋とともに日本三霊橋の一つとして知られる。最初に架けられたのは天正18年（1590）、現在のものは昭和45年に架け替えられたという。

女性達は、108の煩惱の板橋を渡り終えた後「あの世」である姥堂に籠もった。

姥堂には阿弥陀如来、釈迦如来、大日如来を中心に、その両脇には当時の日本の「クニ」の数だけ、六六体の姥尊小像（オンバサマ）が祀られていた。この姥尊像は大日如来の化身、立山権現の母神とされ、芦峠寺の諸行事の中心的存在だった。

堂に籠もった女性は、真っ暗な堂の中で一心に浄土への転生を祈った。

やがて読経が終わり堂の戸が開かれると、目の前に太陽の光を浴びて光り輝く立山連峰

が広がった。それは彼女達が、浄土に生まれ変わった瞬間だった。その眩いばかりの光は、何物にも代え難い仏の光であったに違いない。

灌頂会が終わると、血盆経や血脈（極楽へ生まれ変わる証明書）が配布された。

現在、この女性救済の姥尊像は、閻魔堂と立山博物館に安置されている。片膝を立てて何かを睨み付けるように目を見開いた姿は、何を意味しているのだろうか。私には、あらゆる困難を乗り越えて現世を逞しく生き抜く女性の姿を象徴しているように思える。

4. 玉殿の岩屋

次に、曼陀羅を考える場合、玉殿の岩窟は一つの核心をなす。

それは室堂平から梵語の「標識」に導かれて仙道を少し下った岩壁の中段にある。

岩嶺寺系にもハッキリと描かれているが、山崎カールを隔てて真正面に立山と浄土山の景観を仰ぎ見ることができる絶好の地点である。左手には大日岳がどっしりと聳えている。

ある秋の日の午後、ここに座して立山の上空に広がる雲と光を見つめた。

岩窟は二つあるが、一方の岩窟には一〇数体、もう片方にも数体の石仏がある。

身にまとった赤の装束とそこに供えられた供物は、無言の内に今もこの山への信仰が人々の間に連綿と続いていることを告げていた。

この岩窟には一つの謂われがあった。

9世紀、10世紀の天台、真言密教の伝播からさらに遡る大宝元年（701）、佐伯有頼（または有若）が、「神」に導くという白鷹を追いかけて山に入ると一頭の熊に出会った。

矢を射かけ山中へと追っていくと、熊はこの岩窟に逃げ込んだ。

中に入るとキラリと光る仏の姿が目についた。古来より熊は山の神とされるが、有頼が出会った熊も、実は立山を開山するために阿弥陀如来（立山権現）が化身した姿だった。それは山の神が仏教と融合した瞬間である。

立山博物館発行の「手引き書」には、この開山伝説の象徴、矢疵阿弥陀如来像の写真が掲載されている。左胸にある穴はその時できたものという。

しかし、この狩りの光景こそ、立山曼陀羅縁起の軸となるものだが、芦嶺寺系、岩嶺寺系ともにほとんど目立つことはない。特に前者は、地獄の様相が幅を効かせ、よほど丹念に見なければその姿は見る人の心には止まりにくい。その後の有頼が慈光と名乗り、立山を開山した人物であることを考えれば、両者共にもっと印象に残る描き方がなされて当然のようにも思えるのだが、いかにも小さい。だが「仏」が山の「神」に化身して導くとは妙味である。この変身がなければ、その後の立山曼陀羅も生まれなかった。

それにしても神と仏が融合する信仰に対して、当時から日本人という存在はなんとおお

らかであったことか。世界の一神教を信ずる民族にとってはあり得ない。

5. 立山信仰を腑脱する

次にこの二つの曼陀羅、どこから眺めて描かれたものだろう。

実は、登山者である私にとってこのことこそ最も注目したい点であった。

立山を里から遙拝するなら芦峯寺の尖山（559メートル）、あるいは来拝山（899メートル）だろうか。前者は古来から祭祀が執り行われ、頂から青銅製の鏡も出土している。後者も立山信仰ゆかりの地として多くの人々がこの頂から立山を眺めたという。

しかし、立山曼荼羅に描かれた絵図はかなりワイドである。

これだけ天空から山麓まで幅広く見渡せる地点は、魚津、滑川、富山の上空あたりにない。しかし、浄土の象徴である立山はもとより、室堂の一ノ谷の岩窟、玉殿の岩窟、その周囲に点在する地獄、あるいは称名滝、麓の岩峯寺や芦峯寺の宿坊等まで包括して描くにはもっと近い視点がどうしてもいる。また、もう一つの曼荼羅の軸、地獄の象徴・劔岳を「針の山」として描くには、この山の実像を見て、險難とそこに潜むオドロドロシサを実感しなければ、このような鋭さは決して表現できるものではない。

では、立山曼陀羅に見る地獄と極楽の両方を同時に実感できる場所はどこか。

一つの仮説だが、それは大日岳しかない。特に地獄の象徴・劔岳は、室堂周辺から眺めると安定感はあるが、針の峰のイメージはない。だが大日岳から眺めるその姿は、まさに針鋒であり、ちょっとやさつとの力では近寄りたがたい山であることを「今」も実感させる。

東面の仙人池から眺める八ツ峰を中心とした劔岳も確かに豪壮ではある。

魚津市街から見る劔岳も、大窓、小窓、三の窓を従え、峨々として聳えてはいる。

大伴家持も越中に赴任していた頃、この方面から見る劔・立山連峰を幾多の和歌に詠み込み絶賛した。また、黒部峡谷を挟んで後立山連峰、鹿島槍ヶ岳や唐松岳周辺から望む姿も岩の殿堂としてのこの山の持ち味を十分に示している。

しかし、「針の山」を実感するには、やはり大日岳こそ最もふさわしい。

室堂の玉殿からだとおよそ曼陀羅に描かれた極楽浄土の世界「しか」見渡すことはできにくい、ここに立つと地獄の劔岳と極楽の象徴、浄土山、大汝山、雄山を同一画面に見ることができた。さらにもう一つの信仰対象、薬師岳もその全身を見渡せる。

マンダラはサンスクリット語でマンダ（本質）、ラ（得る）を表し、同時に悟りの空間をも示す。そう考えると、大日岳は立山曼陀羅に描かれるすべてを遠景、近景の中に上から下までつかみ取ることができる。この岳こそ立山曼陀羅に見る地獄への「畏れ」と「怖れ」、そして極楽浄土の「慈悲の心」を同時に感じ取ることが出来る唯一の場所なのだ。

また、山麓の芦峯寺と大日岳、立山連峰の間には、もう一つの法則が読みとれる。

布橋を渡り、かつての姥堂跡に立つ遙望館前に立つと、真正面に大日岳がある。

上代の行者は富山平野から劔・立山連峰を眺め、姥堂周辺から大日岳を眺め、室堂に至り、一の谷や玉殿に籠もった。そして大日岳に至って修行を積んだ。劔岳はその究極の修行の場であった。立山曼陀羅はその地獄と極楽を集大成として描いたカタチだろう。

さらに何より大日岳が立山曼陀羅の俯仰起点と考える「根拠」は、明治26年(1893)、河合磯太郎氏によってこの頂の「七福岩屋」と呼ばれる岩窟から修験者が籠もった痕跡と銅錫杖頭が発見されていることである。玉殿の修験者もさることながら、この頂に籠もった修験者こそ立山曼陀羅確立の立役者のような気がする。

6. 劔岳登頂

やがてあたりは急に静かになった。そっとツェルトの裾をあげると、頭上には白い日輪が顔を見せている。それは劔岳の「地獄曼陀羅」が「極楽曼陀羅」に変身した瞬間だった。私達は大きく背伸びをすると、鬼の爪を思わせる霰の残骸を踏みしめ夏の頂に向かった。

眼下には長次郎谷の大雪渓が見えた。陸軍省参謀本部陸地測量部からこの山に三角点設置の命を受けた柴崎弥太郎一行が辿ったルートである。

柴崎一行の劔岳測量事業は当初困難を極めた。

第一に、まず地獄の山・劔岳に登るということは、立山曼陀羅に描かれる極楽浄土を否定することにつながる。その考えは、とりもおさず立山の禅定登山の否定にもつながりかねず、地元理解を得るのは容易ではなかった。第二に、例え理解、あるいは「黙認」されたとしても、測量はその登頂ルートを見極めなければ成り立たなかった。

一行は当初、大山村の宇治長治郎の案内のもと、別山尾根や馬場島ルート、あるいは北面からの接近を次々と試みた。しかし、いずれも岩壁が前途に立ちはだかり、登頂の可能性は見いだせなかった。そしてようやく発見したのが、古来の伝承にある「雪を背負って登り、雪を背負って下る」三の沢(長治郎谷)だった。生田信らとその絶頂に立ったのは、明治40年(1907)、7月13日のことだった。柴崎自身は7月28日に登頂した。

しかし、よく考えると、登頂ルートとして長治郎谷が選択されたことはしごく当然のことでもあった。それは穂高連峰と比較するとよくわかる。両者は共に岩壁の山だが、劔岳は穂高にはない氷河の名残である万年雪渓を持つ。実際、後立山連峰から劔岳を眺めると、本峰に向かって一直線に長治郎雪渓がその直下まで駆け上がっている。当初、柴崎一行が登路を岩壁によって塞がれたと考えると、岩壁登攀の技術も確立されていない当時「雪渓を見方に登りそして下る」という考え方は、しごく当然であった。ヒマラヤにおいても岩

壁登攀によって達成された山より、雪を味方として成し遂げられた登山の方が多し。

ちなみに同時期の名案内人・佐伯平蔵の活躍を記念して名付けられた隣の平蔵谷も、長治郎谷と同じく雪を味方に登降するルートである。しかし、この谷も別山尾根と同じく頭上に頂上南壁が立ちはだかった。

余談だが、測量隊登頂の立役者となった宇治長治郎が、その頂に立ったかどうかは不明である。しかし、明治42年(1909)、日本山岳会の吉田孫四郎、河合良成、石崎光揺ら七人によって劔岳の一般登山者の「初」登頂がなされた。山と溪谷誌上には、頂上で撮影されたという写真には、吉田らと共に長治郎の姿が認められる。

7. 四等三角点の山

現在、三角点は約10万6000ヶ所設置されている。

測量は今も昔も三角測量が基本だが、三角点は緯度、経度、標高の測定基準となった。その種類は一等から四等までであり三等三角点は石標をもつ。その三角点間の距離は、一等が約45キロメートル、二等8キロメートル、三等4キロメートル、四等2キロメートルという。また、標高の測定には別に水準点もある。二つの離れた地点にそれぞれ標尺を立て、水準器をおいてその差から測定した。

しかし、劔岳の場合、先にも触れたように、地元を説得した後も測量は容易ではなかった。本体の測量以前に、周辺に山々に20ヶ所以上新しい基準点を設定する必要があった。それに山岳の測量は特に天候に左右される。加えて険しい登路を辿っての資材の運搬は相当の困難と危険が伴う。その結果、この時の測量は、頂上に石標の設置を伴わない四等三角点を設けての測量となった。得られた劔岳の標高は2998メートルだった。

標高はその後、一時期3003メートルと改訂されたが、劔岳の頂にようやく三等三角点の石標が設置されたのは、平成16年(2004)のことである。現在の劔岳の標高はGPS測量も加え2999メートルと定められた。参考までに、享和3年(1083)、日本地図を完成した伊能忠敬は、富士山の標高を3928メートルと測定している。

8. 真の劔岳初登頂者

ところが測量は成ったが頂では衝撃の事実が待っていた。

頂の一角で、大日岳と同じく銅錫杖頭と鉄剣(槍)が発見され、焚き火の痕跡が認められた。その錫杖と鉄剣は現在、重要文化財として立山博物館に陳列されているが、それは奈良から平安時代に作られたものという。

その意味するところは、劔岳の初登頂者は遙か古来の修験者であるということだった。

その模様は新田次郎の作品でも感動的に語られ、平成 21 年（2009）6 月には、東映作品として木村大作監督により映画化もされた。

さらにこの「登頂記」にはさらにもう一つの逸話があった。陸軍省は、測量隊が四等三角点の設置に終わったこと、初登頂ではなかったことから、その功績を「ナカッタコト」にしようとしたという。

かつて日露戦争を間近に控えた頃、内容は違うが似たような出来事があった。

八甲田山で青森第五連隊が大遭難を引き起こした際、同時期、弘前 38 連隊は十和田、八甲田連峰のダブル踏破に成功した。しかし、この時もその功績は「秘匿」されようとした。いつの時代も軍という組織は不可解な価値基準もつものではあるようだ。

9. 日本型登山の原型

先にも少し触れたが、目的は違うにしても立山詣も実のところ登山に他ならない。

その初発は奈良・平安時代の修験道に発する。

立山は 701 年に慈興上人によって開山され、加賀の白山は養老元年（717）に泰澄上人によって開かれた。一方、欧州アルプスの場合、最高峰モンブランが初登頂されたのはそれから約 1000 年の時を経た 1786 年のことであり、日本の「登山」の歴史の方がはるかに古い。

その後、槍ヶ岳は、文政 11 年（1828）、播降上人が初登頂し、その頂に仏像を安置した。また、穂先には後続の登拝者のために山鉄鎖が設置された。

こうしてみると、上代から連綿と続いた修験道を軸とする山岳信仰の時代にこそ、日本型登山の原型がある。『芦峯寺ものがたり：山と溪谷社・鷹沢のり子』によると、立山山拝が全盛期を迎えたであり、毎年 6000 人もの参詣者があったという。人々は富山から芦峯寺まで一日、さらに芦峯寺から室堂に至り、室堂小屋で小休止した後、雄山を目指した。

しかし、立山信仰登山は明治維新を境に急速に衰退していった。

明治 2 年（1869）、時の政府が廃仏毀釈令を出した。芦峯寺、岩峯寺は取り壊され、姥堂も仏像や仏具とともに姿を消し、立山権現も雄山神社に、中宮寺も祈願殿と名前が改められた。

これ以降、日本の「登山」は、近代アルピニズムと廃仏毀釈の嵐に挟まれ、日本古来の姿を失い、単に西洋の後追いをするに過ぎなくなったと揶揄されるのはこのためである。

余談になるが、立山の外国人初登頂者は、明治 12 年（1879）のロバート・ウィリアム・アトキンソンである。続いて翌明治 13 年（1880）には「日本アルプス」の名付け親、ウィリアム・ガウランドも足跡を残した。大正 7 年（1916）には、村井米子が芦峯寺村民の反

対を受けながらも登頂し、女人禁制であった立山信仰の時代は急速に変わっていった。

10. 劔岳とアルピニズム

陸軍の測量隊より先鞭はつけられたが、劔岳がアルピニズムの舞台として表舞台に出るには、大正から昭和初期までもうしばらくの時を要した。

大正6年(1917)、ようやく黒部の大家として知られる冠松次郎パーティが早月尾根を初登攀して頂に至った。続いて大正12年(1923)には岡部長量が八つ峰の縦走を果たし、大正14年(1925)、今度は今西錦司が先の源治郎尾根を初登攀した。同年、宇治長治郎は、冠松次郎を案内して黒部川下廊下を完全廻行し、十字峽を発見した。

劔岳はこの後、チンネ、東大谷等の登攀も陸続と成し遂げられ、名実ともにバリエーション開拓時代の幕開けを向かえる。また、昭和6年(1931)2月27日には、伝説に残る生まれながらの単独行者・加藤文太郎が、冬期単独初登頂を果たした。

その登山は、今に照らせば厳冬期、ソロ、スピードともに、登山の究極の姿だった。彼は室堂を早朝に出発すると、別山乗超から劔沢を下降、柴崎一行と同様、長治郎谷からこの絶頂に立ち、再び同ルートを、同日の深夜、室堂に戻った。天候と雪質に恵まれたとはいえ、驚くべき行動力である。彼もまた、雪を味方に登頂した。

その後、太平洋戦争において登山は一時期下火となったが、戦後、日本はマナスル登頂により登山の黄金期を向かえ、これ以降、登山界は海外登山が飛躍的に拡大し、ヒマラヤ鉄の時代へと突入していく。劔岳登山はその中核となった。

※

それにしても奈良・平安期、劔岳に登り、修行した人物はいったいどのようにして登路を発見し、絶頂を極めたのだろう。

立山連峰には、安土桃山時代、天正12年(1584)12月、佐々成政の厳冬期、立山温泉、ザラ(佐良峠)、平の渡し、針ノ木峠、信濃大町・籠川への北アルプス横断の逸話も残る。また、加賀藩の奥山廻役も寛永年間から明治にかけて藩林保護を目的に見廻り検分を行い、北アルプスの主な絶頂に足跡を記してはいる。

しかし、さらに遡る上代における劔岳登頂は、信仰を軸とするとはいえ驚嘆する。

「雪を背負って登り、雪を背負って下る」とはいうものの、その強靱な体力と精神力は現代の登山家をはるかに凌ぐ。不退転の決意のもとに実行された「地獄の頂」への登山とそこでの修行は、玉殿や大日岳以上に厳しいものであったことは疑いない。弘法大師も草鞋3000足をもってしても登頂できなかったというが、彼らは地図も満足な装備も身に付けず、ひたすら信念だけを力として、地獄の山に向かった。その行為は後世の価値観に照

らせば、最高級に位置する探検登山である。

今、改めて立山曼陀羅を見つめ直した時、アルプス黎明期の登山者はいざ知らず、現代の登山者は登山の中に何を目指しているのかと考えさせられる。

11. 平成に生きる曼陀羅の世界

かつての宗教登山は、探検登山の時代を経て、スポーツ、レクリエーション登山になった。特に昭和46年(1971)、富山、大町を結ぶアルペンルートが開通して以来、室堂も阿弥陀が原も弘法も美女平も、訪れる人々が飛躍的に増加した。

しかし、彼らは室堂ターミナルの階段を登ったとたん、周囲の絶景に目を奪われることはあっても、同じ室堂に立つ享保11年(1726)再建の「立山室堂」には関心を寄せることは少ない。ましてそれがどのような役目を果たしたのか、歴史に想いを馳せる人々はさらにまれである。一ノ谷の岩窟や玉殿も同じだ。以来ここは観光客の散策と劔岳や裏銀座ルートへの「通過点」になった。

※

次の日、劔岳・真砂沢を離れ、立山雷鳥沢にテントを張った。

午後のひととき玉殿を訪れた。夕日に輝く頂を眺めながら一人静かに座していると、不思議に心が安らぎ、山への畏敬の念が湧いてくる。玉殿は今、過去と現代を結んで、立山の歴史と人々の心を実感できる第一級の迎賓館である。

夕刻、立山の頂を、茜色に染まったちぎれ雲が西方十万億土の浄土へと流れていった。この光景は奈良・平安の昔も変わらない。

劔岳で私達のパーティが遭遇したのは熱的界雷だった。後で知ったことだが、当時、平蔵の科尔(鞍部)では避難小屋に落雷し五人が火傷を負った。そして次の日、今度は二人の学生が平蔵谷の空を飛んだ。私達の昨日のルートだった。劔岳は今も昔もやはり「地獄」を描いてある。あの時の雷鳴は、閻魔大王の警告と威嚇の声だったに違いない。

翌朝、神々の頂は立山ワインの色合いに輝いた。それは極楽浄土の色合いである。

(よねもと・みつのり=城陽市立青谷小学校)

参考文献

新田次郎『劔岳・点の記』文春文庫・

鷹沢のり子『芦峠寺ものがたり』山と溪谷社

加藤文太郎『単独行』二見書房

『常設展示観覧の手引き：富山県 [立山博物館]』

『山と溪谷：2009年6月号』